

Newsletter of Japanese Coral Reef Society

No.26 [2005 / 2006 No.1]

contents

page

連載1:サンゴ礁に暮らす人々 -18-	2
連載2:サンゴしょう夜話 -18-	2
評議員会 議事録	3
日本サンゴ礁学会第8回大会 要項	4
三菱プロジェクト シンボ案内	5
DIALOGの紹介及び参加の勧め	5
ICRI News	6
連載3:若手会員の眼 -21-	6
連載4:瀬底日記 -最終回-	7
連載5:サンゴ礁関連施設探訪 -12- [自然環境研究センター]	7



連載 1 サンゴ礁に暮らす人々 -18-

綾取り

慶應大学名誉教授 近森 正

テ ポナウナウ、テ ポナウナウ
テ ポチア ウア、テ ポチア ウア
ウア レレ、ウア レレ
ポロイチ ポロ ラウ メアメア・・・
歌いながら綾取りをする少女の指先
が器用に動く。歌の意味は誰にもわか
らない。

・・・モツ ラ「マニヒキ」。

島の名前が出てきたところで歌がはた
と止む。いまだで笑みを浮かべていた彼女は一瞬、淋しげに目を伏せた。
彼女の名前はマリアン。もうすっかり娘のように見えるけれど、まだ十二
才になったばかりである。くるくるした目には、あどけなさが残っている。
毎朝、私たちの発掘が始まると、きまってやって来て、綾取りの見事な
技を見せてくれる。

マリ안의両親は昨年、マニヒキ環礁を襲ったサイクロンの高波に妹
たちと一緒にさらわれてしまった。いまだに行方がわからない。彼女は
ここブカブカに養子として貰われて来たのだった。

「マニヒキに帰りたいの？」彼女は黙って首を横に振り、ふたたび可愛
らしい笑顔にもどった。



サンゴ礁の自然はきびしい。高潮や早魃、津波などの災害、それに人
口の過剰などによってしばしば食糧の不足に見舞われる。養子にはそれら
を回避するひとつの方法として、島ではさかんにおこなわれてきた。養
子にはふたつのやり方がある。多くの場合、子供が生まれる前に親同士
によってきめられるタマ・ココチ。そのような養子は養父と同じ系譜に入
れられ、実子と同じように土地や食糧の分配を受ける。もうひとつはタマ
ワガイ。マリアンのように大きくなってから、養子として引き取られた場
合、系譜は移らない。その代わり養父母を助けて、はやくから家事や農
作業の仕事を課せられる。食事の準備にココヤシの実の果肉をかき出す
のはいつもマリ안의仕事だ。

マリ안의両手の間で、糸が小さなカヌーの形をつくり、それが波を
表わす糸の上下運動に乗って進み、島をめぐる。歌いながら図形
があざやかに変化して、物語が語られる。マリアンは得意になって、い
ろいろな綾取りを見せてくれる。

ポリネシアではどこにいても綾取りがさかんだ。おそらく世界中で最
も複雑な図形を作り出した民族ではないだろうか。カヌーで航海した彼
らは綱や紐を巧みに操らなければならなかったからだろう。

ヤシ林の向こうの炊かから彼女の名を呼ぶ甲高い声が聞こえて来た。

「マリアン！はやく火をおこして！魚を焼いて！」

写真：綾取り（ワイワイ）は子供だけではなく、大人も興がむけばみんなで熱中
して遊ぶ。図形は「八隻のカヌー」「夕陽が沈む」「潮がひく」「黄色いウミガメ」
など、マリアンに聞いただけでも軽く20種をこえる。「ネズミを捕らえる」は右
手の親指でつった輪のなかに左手の人差し指からくり出すネズミの図形がつぎ
ぎに滑り込んで行く。まるで手品のようだ。

連載 2 サンゴしょう夜話 -18-

藻球とシュランガー (S.O.Schlanger)

金沢大学名誉教授 小西 健二

シボーガ号探検報告 (Weber van Bosse & Foslie, 1904) に先
立つ遙か昔から、英仏海峡のマールをはじめ、有明海や北海道沿岸
で、紅藻無節サンゴモの造る石灰藻球は、ヒトの暮らしと深い関わりを
もってきた。更新統琉球石灰岩から最初に記載された化石 (Heydrich,
1900) も、中新世中期最温暖期 (15-17Ma) の女神石灰岩 (静岡
県) を卒研で調べた西和田 (1891 卒) が専攻した造礁生物も、石灰
藻球であった。当今の rhodolite (Bosellini & Ginsburg, 1971),
rhodoliths にあたる。

1962 年から中部琉球で隆起サンゴ礁複合体の地表調査をはじめた
Schlanger と私は、占める容積から、「石灰藻球」がその主要メンバー
であることを知り、半ば冗談に「アルガル・ボールズ」と呼び作業を進め
た (挿入写真)。その現生試料を学ぶため、東大海洋研共同利用の淡青
丸で、喜界島周辺の音波探査と採泥を 1966、1977、1985 の 3 回行い、
水深 1-2m のチャネルから水深 150m までの、潮流の影響下で、不安
定な砂礫質の底質上に卓越することがわかり、その間コケムシ動物とと
もに、炭酸塩生物堆積相の亜熱帯から温帯、更には亜寒帯 / 寒帯への
入射日照エネルギーの緯度 (水温 / 水深) 勾配を反映するという仮説を
たてた (Schlanger & Konishi, 1966, 1975)。その後石油公団開発
技術研究所は、宮古島西方浅海域の綿密な底質調査 (辻ほか, 1988;
Tsuji, 1993) の結果、主に水深毎に規制される 6 つの堆積相を識別し、
そのなかで「藻球—大型底生有孔虫相」は 60-150m の堆積深度と秒
速 60-100cm の潮流を特徴づけることをあきらかにした。

同じ Phototrophs で、造礁サンゴと藻球をつくる紅藻サンゴモが異
なる水深に卓越生育する理由につき、カリフォルニア湾西岸を自然実験
槽にみたと、平均 35%と同じ塩分下でも、もともと水温 18.6 度以上の
貧栄養海域を好む造礁サンゴは湾口、最低水温 16 度の中～富栄養下
で藻球相が湾中部、最低水温 13.7 度の富栄養下でコケムシ / 軟体動物

(Heterozoan Association) 相が湾奥と、水温とともに栄養塩濃度が
制約することが最近主張された (Halfar et al., 2004)。もとより状況証
拠に基づいた推論といえるが、一考に値しよう。

昨年の ICRS でも、サンゴ礁生態系で富栄養化の指標として大形底
生有孔虫の実用性を紹介した Hallock は、長年にわたりサンゴ礁生態
系の消長と栄養塩濃度の重要性を論じるチャンピオンとして知られる
(Hallock & Schlager, 1986 ほか多数) が、その流れを継ぐ Mutti
(Mutti & Hallock, 2003) が、上記 Halfar と共著 (2005) で、中新世
中期最温暖期の熱帯—亜熱帯浅海炭酸塩複合体から、貧栄養域に適應
し共生藻類をもつ造礁サンゴと大型底生有孔虫が「絶滅」し (Rau &
Sepkoski, 1986)、藻球相が置換する要因として、全球規模の水温と
栄養塩濃度の変化を、当時の気候変動の生んだ、陸上風化の促進と南
極氷床の融解による沿岸湧昇と大洋湧昇の発達に帰するという大胆な説
明を試みている。

日本のサンゴ礁生態系の回復・復元・保全を果たすため、各地・各種
の「陸域から流入する栄養塩濃度のモニター」に、「早急な指針の提示
が望まれる (環境省・日本サンゴ礁学会編 2004, p.69-70)」。



写真：喜界島 (鹿児島県大島郡喜界町) 上嘉鉄の琉球石灰岩 (アルガル・
ボールズ相) 露頭の前に立つシュランガー博士 (1962.7.20 撮影)

日本サンゴ礁学会 評議員会 議事録

2005年7月9日 サンゴ礁学会評議員会 議事録
於：サザンプラザ海邦
書記：藤村、渡邊

[2004年度評議員会]

■出席：大見謝辰男、大森信、鹿熊信一郎、茅根創、菅浩伸、木村匡、小西健二、杉原薫、鈴木款、立田譲、土屋誠、中井達郎、中野義勝、灘岡和夫、西平守孝、林原毅、日高道雄、藤原秀一、藤田和彦、藤村弘行、松田伸也、山里清
■委任状：秋道智彌、B.E.Casareto、近森正、波利井佐紀、山野博哉、中森亨
■欠席：大森保

会長挨拶(山里)：日本サンゴ礁学会は約8年前に設立されましたが、設立の目標は、日本におけるサンゴ礁研究の活性化と第10回国際サンゴ礁シンポジウムの日本誘致でした。当初の目標は、大方達成し、今期をもって、大方の評議員の方々の、4期8年の長い任期がようやく終わりました。ご苦労様でした。本学会は、これから新しい体制で新しい目標に向かって進まれることと思いますが、私からの学会へのお願として、危機にある、サンゴ礁の保全、再生に力を注いでほしいと申し上げたいと思います。特に、サンゴ礁に杉林を造ることだけに終わらないで、自然のサンゴ群集を保ち、取り戻す方向でお願いします。

事務局・茅根：旧評議員任期は、2003年7月1日～2005年6月30日、新評議員は2005年7月1日～2007年6月30日である。今回は、新旧合同で行う。

1. 事務局報告

○会員動向(2005年7月6日現在)435(通常310,学生53,会友40,団体14,賛助9,名誉0)会費の3年滞納が34。学会誌・ニュースレターの発送を取りやめ、会費納入を依頼する。

○会計報告
2004年度は、収入が10182691円、支出が4798641円。収入は、日本のサンゴ礁執筆料155万円、10thICRS支援金返還120万円、10thICRS会計からの4054076円を含む。10thICRS会計からの405万円は、出版のための委託費。
学会事務センター破綻で140万円の損害。10thICRSの黒字・支援金の返却、日本のサンゴ礁執筆料等により損害を補填。
毎日ビジネスサポートへの委託と諸経費。昨年度は移行費用、名簿作成がかかったのが高いが、それを差し引くと学会事務センターと同程度の経費。
立田：10thICRS会計からは10thICRS出版費等、支援返金は支援金の返還とする。
中井：毎日ビジネスサポートに移行してNLが届かないことがあった。⇒現在は解決。
事務局：委託先は今後も毎日ビジネスサポートでよい。→1年後にもう一度見直す。
事務局：学会は300万の収入、支出。うち委託が100万。使える費用は200万。

事務局：学会事務センター破産後の対応について説明。破産の経費・被害と、その10thICRSによる補填。被害学会協議会への幹事としての参加。和解金11万。預かり金193万からこれらを引きいた分が実際の損害。大手学会は破産直前に内部情報によって引き上げたところが多いようだ。中小学会は損失大きい。文部科学省に対して中小学会の意義を主張する必要があると考える。

事務局：事務局の仕事について説明。

2. 各委員会報告

○企画委員会
中森：座長が代理で説明。日本のサンゴ礁の出版。

○編集委員会
日高：委員会の経緯。編集委員会の説明。2005年10月にNo.7を発行予定。服田さんからの活性化方策提案の紹介。
茅根：impact factorへの登録はどうなのか。→年2回出版が登録基準であり、これを目標
小西：文科省に対して学会誌出版助成の申請をしているか？→条件厳しく無理、年4回出版が申請基準。

○広報委員会
中井：昨年度NLの発行についての説明。広報委員会の経緯。広告料の毎号は確保できず。webの電子媒体NL掲載・人手不足検討中。NLへの投稿規定紹介。

○選挙管理委員会
灘岡：新評議員27名。開票6月8日。投票数58のみ。
杉原：返信用の封筒、切手がいっていない。→通常ない。今後入れることも検討。

○保全委員会
土屋：県庁に特別採捕に関する日本サンゴ礁学会の意見を提出。特別採捕の許可申請に関する書類は少し厳しくなった。以下、各班からの報告。

・モニタリング班(木村)：日本のサンゴ礁で扱った文献のDB化。リーフ・チェックのモニタリングデータの整理。国環境研の秘書手伝い。環境省24サイトの毎年モニタリング昨年より開始。これもデータベース化。
・保全再生、特別班(大森)：ガイドラインについてNL、ホームページに掲載。県からの報告は特に無い。ICRIからも移植などの事業推進への懸念。移植はそう簡単なものではないということとを国の関係機関に知らせる。ガイドラインの英訳をICRIに出す。
・統合沿岸管理班(鹿熊)：本年度はMPAについて活動したい。沖縄県で開催される海フェスタ、海の総合展に関与する。
・海外展開班(土屋、高橋)：パラオと日本が今年からICRIの事務局を担当するので、これが活動の中心となる。環境省と連携した活動としたい。2007年に沖縄で太平洋学術会議が開催される。日本学術会議と沖縄の全ての大学協力。
・教育班(中野)：沖縄の辺戸名高校に環境学科。そこで教育活動の協力。本年度のサンゴ礁学会で発表予定。小中学校いくつかで勉強会を開催。
・広報班(中井)：ガイドラインなどのアウトプットを外にリリースする。広報の役割、保全・保護問題の地域ごとの個別の例を紹介、整理。まだできていない。

○安全委員会
杉原：昨年のサンゴ礁学会で安全アンケートを実施したが、回答数が非常に少なかった。今後もNLを通じて安全に関する地道な啓蒙活動を行うとともに、webを使った新しい企画を立ち上げていきたい。
茅根：大学の独法化で安全委員会の重要性

が高まった。フィールドに関するものが東大でもできる。ガイドライン作成必要。他学会との連携必要。情報の共有化。
杉原：大学以外の機関に所属している人の意見を今後の活動に是非反映させたい。
鈴木：保障体制。大学には金が無く、保険を掛けるだけ。
茅根：救援保証のある保険を掛けることが必要。

3. その他、全体を通しての審議

○学会誌に関して
渡辺：学会賞・記念後援を設けて、インセンティブにする。
茅根：販売と図書館への設置など。検討必要。

○メールによる審議について(確認)
茅根：評議員MLで議論。2週間以内に異議が無ければOK。異議があれば評議員会で議論。

○メール審議承認済み事項
茅根：2007年6月13～17日。第21回太平洋学術会議への共催を承認済み。合同大会連合への参加も承諾。中小学会どうしの情報交換、共有。

○旅費について
従来、正規運賃の半額。
灘岡：委員会のアクティビティを高める必要がある。評議員以外で年数回開催する必要がある。旅費を制限する必要がある。
木村：若手には全額支給は。
鈴木、井龍：秋の学会時は出さなくて良い。
中野：評議員だけでなく、NPOなど参加者へも支出を含める必要がある。
野崎：ケースバイケース。顔を合わせて議論する必要があるものもある。そういうものには旅費を支出し、評議員会に報告するのが良いと思う。
立田：旅費格安の実費、領収書を取る。
茅根：評議員の旅費については総会にもかける必要がある。→今回は正規の半額。次回から旅費請求書にもとづく格安割引料金の実費、大会時はなし。

○10thICRSについて
鈴木：Proceedingsについて。167PDFに。残り130のうち75はレビューのコメントへの対応中。残りはなしのつづ。コンピーナーが動かないセッションが12もある。これは国内の対応者に任せる。8月12日までに投稿。9月10日までに最終原稿の形でBack。
鈴木：Proceedingsの印刷委託はプランDでいいか。→良い。
立田：一億600万円収支ゼロで。うち400万円はJCRSへ。

○その他
鈴木：三菱商事のプロジェクトの紹介。

[2005年度新評議員会]

■出席：赤嶺淳、安部真理子、新垣裕治、石川義朗、井龍康文、岩尾研二、岡地賢、鹿熊信一郎、梶原健次、木村匡、小西健二、杉原薫、鈴木淳、鈴木款、立田譲、灘岡和夫、野崎健、長谷川均、日比野浩平、日高道雄、藤田和彦、藤村弘行、山城秀之、渡邊敦、渡辺俊樹
■委任状：秋道智彌、B.E.Casareto、野島哲、橋本和正、服田昌之、堀信行

新会長・小西会長：挨拶、新体制紹介、事務局長は茅根、副会長は西平、庶務は茅根研(飯島、所)。

○国際関係について
小西：ICRIの委員会。積極的参加。
灘岡：保全の国際班を他の分野も含めた国際委員会に格上げする必要性を認めてほしい。

山里：ICRI対応の国内委員会をつくるのはどうか。
土屋：環境省・高橋さんと相談した。
日比野：ICRIについて説明。

○各委員会委員長選出
小西：国際委員会(仮称)の委員長は土屋。正式名称は今後検討。保全委員会は灘岡。安全委員会は杉原。企画運営委員会は鈴木款。賞委員会は野崎。広報委員会は日比野。編集委員会は日高。選挙管理委員会は長谷川。

○名誉会員について
小西：山里、近森、浜田を名誉会員にする案が提出された。→総会決議が必要なので、次回総会に提案する。

○会長幹評議員推薦について
小西：木村、橋本を評議員にする。残り一人は保留。

○今後の活動方針
プロシーディングスの完成。ICRI、ITMEMS、2006年10月メキシコ。若手からサイエンスの研究専門委員会の設立を期待。
灘岡：委員長は評議委員相当になる。班長もして欲しい。
日比野：ICRIパラオ総会議題について説明。今年10月にパラオで第1回会議。

○第8回大会準備状況
藤村：大会準備状況を資料で説明。

○会計について
茅根：会計事務局で引き継ぐ。委員会活動を機動的にするために、各委員会活動費をあらかじめ分配して、支出状況を報告してもらう形にしてみようではないか。

○後援について
茅根：プラザハウス(沖縄)の出展の後援→藤村が対応。

新評議員、新体制が決まる

去る6月8日に開票されました会長・評議員選挙および7月9日に開催されました評議員会の結果、下記のように新しい体制が決まりました。任期は2年間です。

< 新評議員 >

赤嶺淳、秋道智彌、安部真理子、新垣裕治、石川義朗、井龍康文、岩尾研二、岡地賢、鹿熊信一郎、B.E.Casareto、梶原健次、木村匡、杉原薫、鈴木淳、鈴木款、立田譲、灘岡和夫、野崎健、野島哲、橋本和正、長谷川均、服田昌之、日比野浩平、堀信行、藤田和彦、藤村弘行、山城秀之、渡邊敦、渡辺俊樹

< 新体制 >

・会長：小西健二
・副会長：西平守孝
・保全委員長：灘岡和夫
・国際委員長：土屋誠
・安全委員長：杉原薫
・企画運営委員長：鈴木款
・賞委員長：野崎健
・広報委員長：日比野浩平
・編集委員長：日高道雄
・選挙管理委員長：長谷川均
・事務局長：茅根創



第8回大会

要項

2005年11月25日(金)～11月27日(日)
琉球大学西原キャンパス内大学会館



日本サンゴ礁学会第8回大会を2005年11月25-27日に琉球大学大学会館で行います。今大会は「科学、人、サンゴ礁の接点」をテーマに学術的研究だけでなく自然保護活動、環境教育、マリンレジャー、水産業などサンゴ礁にかかわる多くの方々の参加を期待しております。また恒例の公開シンポジウムに代わって沖縄本島南部の海岸において一般の方々も含めた野外観察会を開催いたします。自然の地形や生物に直接触れることで小さなお子さんから普段はサンゴ礁に無関係な大人の方まで、サンゴ礁に対する認識を深めてはいいかかでしょうか。

第8回大会実行委員長 琉球大学大学院21世紀COEポスドク研究員 藤村弘行

1. スケジュール

●日程：2005年11月25日(金)～11月27日(日)

●場所：琉球大学西原キャンパス内大学会館
(http://www.u-ryukyu.ac.jp/general/outline/campus_map.html)

10/7(金) 大会参加および発表申し込み締め切り
(電子メール、郵送またはfaxにより受付)

10/28(金) 要旨締め切り
(電子メールによるPDF添付または郵送(消印有効)により受付)

11/2(水) 大会参加費事前払い振り込み期限
(これ以降は当日払いとなります。)

11/25 (金) 大会初日

10:00 大会受付・PCデータおよび
プレビュー受付開始
13:30 - 19:00 口頭発表
(一人15分質疑応答込み)

11/26 (土) 大会2日目

9:00 ポスター発表開始
(発表時間合計1時間以上を各自で設定)
12:00 ポスター発表終了
12:00 - 13:30 昼食
13:30 - 17:30 口頭発表 (途中15分間休憩)
17:30 - 18:30 総会
18:30 - 21:00 懇親会およびポスター賞発表

11/27 (日) 大会3日目

9:00 - 16:00 野外観察会

2. 大会の参加・発表申し込み要領

大会の参加・発表申し込み締め切りは2005年10月7日(金)です。

- ・電子メール、郵送またはFaxにてお申し込み下さい。
- ・電子メールによるお申し込みは
e-mail: h043137@sci.u-ryukyu.ac.jp宛で
subjectを「JCRS8参加申込」としてください。
- ・郵送またはFaxにて申し込まれる方は、下記へお願いします。
〒903-0213 沖縄県西原町千原1番地
琉球大学 理学部 化学系事務局
日本サンゴ礁学会第8回大会事務局 藤村弘行 宛
Fax: 098-895-8565
- ・参加・発表申し込みの記載事項は次のとおりです。
(1) 参加者氏名
(2) 所属(学生の方はその旨を明記してください)
(3) 住所
(4) 電話

- (5) FAX
- (6) e-mail
- (7) 発表の有無
- (8) 懇親会への参加・不参加
- (9) 参加費支払い方法(事前・当日)
- (10) 参加登録区分(一般・学生/会員・非会員・新規)
- (11) 公開観覧会への参加・不参加
- ・研究発表を申し込まれる方は上記に加えて、
(12) 発表題目
(13) 発表者全員の氏名・所属(発表者には○をつける)
(14) 内容概略(100字以内の概略 --プログラム編成の参考にします--)
(15) キーワード(5個程度 --プログラムの索引を作ります--)
(16) 発表形態(口頭発表・ポスター発表);口頭発表の方は使用機材(液晶プロジェクター・OHP)を記載して下さい。

3. 大会参加登録料・懇親会費

事前振込による参加登録料は会員が一般5,000円、学生2,500円、新規会員は無料です。非会員は一般7,000円、学生4,000円です。懇親会費は一般4,000円、学生3,000円です。事前払いの振り込み期限は11/2(水)です。これ以降は当日支払いとなります。当日支払いの参加登録料と懇親会費はそれぞれ1,000円増しとなります。

		事前振込(11/2まで)		当日払い	
		一般	学生	一般	学生
登録料	会員	5,000円	2,500円	6,000円	3,500円
	非会員	7,000円	4,000円	8,000円	5,000円
	新規会員	0円	0円	0円	0円
懇親会費		4,000円	3,000円	5,000円	4,000円

<振込方法>

事前振込にご協力ください(11/2(水)まで)。振込手数料はご負担ください。

郵便振替口座番号: 01730-5-77003

口座名称: 日本サンゴ礁学会第8回大会

- ・通信欄への記入事項: 氏名、送金内容(一般会員、学生会員、新規会員、一般非会員、学生非会員の区別及び、懇親会参加の有無を明記してください)
- ・複数の方がまとめて振り込まれても結構ですが、通信欄への記入事項を全員について明記してください。
- ・振替用紙を26号ニュースレターに同封しましたのでこちらを利用されると便利です。
- ・2004年11月15日～今大会当日までに日本サンゴ礁学会に入会した方(通常会員・学生会員・会員など)に関しては新規会員として今大会の参加登録料を無料とさせていただきます。希望者は事前に学会の入会手続きを済ませてください。入会方法は日本サンゴ礁学会のホームページをご覧ください

ください(<http://www.soc.nii.ac.jp/jcrs/>)。今大会を機にサンゴ礁学会への入会をお勧めします。

4. 講演要旨原稿作成要領

講演要旨は1演題で1枚です。用紙はA4縦置きで、文字は横書きです。

- ・余白は上下3cm、左右2.5cmです。
- ・一行目にタイトル(14-15ポイント中央揃え)、二行目以降に氏名(10-12ポイント中央揃え)、三行目以降に所属(10-12ポイント)、四行目以降に本文(10-12ポイント)、最後にキーワード(10-12ポイント)の順に余白の内側に収まるように配置してください。
- ・講演者の氏名の前に○印を付けてください。タイトル、氏名、所属が長い場合はそれぞれ1行以上にまたがっていても構いません。また、希望者は所属の後に電子メールなどの連絡先を記載してください。
- ・図表や写真(白黒印刷)を必要に応じて張り込んでください。キーワードは要旨の最下端の一行に"キーワード:"に続けて入力してください。
- ・要旨締め切りは10/28(金) (消印)です。電子メールによるPDFファイル添付送信、または原本の郵送により受付いたします。電子メールによるPDFファイル添付送信はWindowsまたはMacintoshのどちらで作成したかが分かるようにsubjectをそれぞれ「JCRS8要旨win」「JCRS8要旨mac」としてください。特殊なフォントを使用される場合は必ずフォントの埋め込み設定を行ってからPDF化してください。電子メールでの送信先および原本の郵送先は大会参加・発表申込と同じです。

5. 口頭発表

口頭発表の講演時間は質疑応答込みで一人15分とします(講演12～13分、質疑2～3分)。発表機材は液晶プロジェクターとOHPを用意いたします。

- ・液晶プロジェクターによる講演ではWindowsはOS Windows XP PowerPoint 2003 MacintoshはOS MacOS X PowerPoint 2004とKeynote2をインストールしたコンピューターを用意いたします。
- ・ファイルの受付とプレビューは11/25の午前中と11/26日の午前中に会場で行います。受付可能なメディアはCD-RまたはUSBメモリーです。
- ・個人のコンピューターも使用できますが、不測の事態に備えてOHPシートもご用意ください。

6. ポスター発表

ポスターパネルの大きさは約180cm(縦)×90cm(横)です。この範囲に収まるように各自ご自由にポスターの大きさを設定ください。

- ・ポスターは9:00までに各自の講演番号が表示されているパネルに張り、12:00まで掲示してください(画鋏・セロテープ等はこちらで用意します)。講演時間は最低1時間とし、各自で発表する時間帯を設定してください(講演時間を表示する用紙を用意いたします)。講演時間帯には必ずポスターの前に立ち、内容の説明・質疑に対する応答を行ってください。
- ・ポスター発表の際にPC用の電源が必要な方はあらかじめご連絡ください。

<ポスター賞について>

今大会も優れたポスター発表にはポスター賞を授与いたします。大会参加者はポスター賞の投票をすることができます。投票用紙は一人一枚を大会当

日に受付で配布いたします。

7. 展示ブース

次の各種ブースを設けます。ご希望の団体は大会事務局までお問い合わせください。

・サンゴ礁に関係する活動を行っているNGO、教育現場などの活動紹介ブース(無料)と企業の製品紹介ブース(有料)を用意いたします。企業ブースの価格は1ユニット30,000円です。

8. フィールドトリップ

＜公開観察会＞

人とサンゴ礁の関わりについて、漁撈や観光などの場としての現成サンゴ礁には多くの関心が注がれ

ています。しかし、人々の暮らす土地そのものもサンゴ礁の一部であることは意外と見落とされていませんか。その土地の地理的特性はそこに生活する人々の歴史文化の基礎として存在し、干潮時に現れるサンゴ礁の浅瀬共々それらに大きな影響を与えずにはいませんでした。このような視点からサンゴ礁地形環境と人との関わりを読み解く観察会を沖縄本島知念半島にて開催します。この観察会は、2004年に開催された第10回国際サンゴ礁シンポジウムの科学巡検に提供された多くのプログラムからその一部を学会員と一般の方に提供したいという意図から企画されました。

【実施場所と内容】

沖縄本島知念半島一帯の隆起サンゴ礁、湧水と史跡を巡る

【案内役】

堀信行(首都大学東京)・河名俊男(琉大)・渡久地健(財)沖縄協会)・中井達郎(国士舘大)・田場由美雄(沖縄県立芸大)

【実施日時】

2005年11月27日(日) 9:00~16:00

【参加費】

無 料 (ただし交通費は実費となる場合があります。今後の案内にご注意下さい)

【公開観察会に関するお問い合わせ先】

中野義勝(琉大) ynknsk@lab.u-ryukyu.ac.jp
第8回大会全般に関するお問い合わせは
藤村弘行(琉大)

e-mail: h043137@sci.u-ryukyu.ac.jp まで。

☆Eメールでお問い合わせの際は件名の頭に「JCRS」をつけて下さい。

三菱プロジェクト

シンポジウム案内

海洋生物研究国際プロジェクト：サンゴ礁ミクロ生態系・物質循環とサンゴの白化との関係の科学的解明に関する研究がスタート

静岡大学 鈴木 款

静岡大学、琉球大学、三菱商事株式会社、アースウォッチジャパンは、本年度より6年間、日本・米州・欧州・アフリカの3地域で、環境変動、温暖化、人間活動に伴うサンゴ礁の白化機構の科学的解明、健全性維持と回復技術の確立・普及を目指した環境保全型の国際的「海洋生物研究プロジェクト(Research Project on Health of Coral Reef Ecosystem: HCORE)」を始めました。

本プロジェクトは、サンゴ礁衰退の最大の問題の一つと言われている「サ

ンゴの白化現象」を科学的見地から研究し、サンゴの白化防止及び回復技術に対する科学的知見の提供を目標としています。研究フィールドは琉球大学熱帯生物圏研究センター瀬底実験所の近くの瀬底ビーチを中心に、研究内容はサンゴ礁における有機物生産者と分解者、有機物、栄養塩の循環、窒素固定等の役割の解明を行います。サンゴ礁生態系のダイナミクスを餌のサイクル、すなわち有機物の生産、分解、捕食という過程と関係づけて解明します。生物・化

2005年8月4日(木) ロアジールホテルオキナワ (那覇市西 3-2-1)

【15:30~18:30 記念フォーラム】

- ・特別講演：「世界の美ら海」岡本 行夫(前内閣総理大臣補佐官)
- ・スライド & トーク：「沖縄のサンゴ礁を見つけて」中村 征夫(写真家)
- ・パネルディスカッション：「サンゴ礁の生命の源を探る：海洋生物研究プロジェクトの新たな挑戦」

＜パネラー＞ 鈴木 款(静岡大学)、土屋 誠(琉球大学)、高橋 啓介(環境省自然環境局)

【18:30~20:00 記念パーティー】

学の統一的研究手法を用いて白化が発生しているサンゴの周辺に生息する海草・光合成細菌・プランクトンなどの数量・餌の種類・量・光合成・呼吸量データの収集、並びに化学的調査研究手法による炭素・窒素・リン・微量元素・タンパク質などの取込量・構成比などの確認を行います。これらのデータをもとに、白化現象の要因などのメカニズムを解明します。更に、白化が回復しているサンゴや、周辺に比べて白化が少ないサンゴにおいても、同様の研究手法にて、回復過程、

或いは白化が起こりにくい原因などを解明し、白化防止技術の提言並びに科学的根拠の把握を行います。

なお、このプロジェクトの開始を記念して上記の日時・会場にて、「海洋生物(サンゴ礁)研究プロジェクト記念フォーラム」が開催されます。是非ご参加ください。

参加申し込み・お問合せは、三菱商事株式会社 社会・環境室 伊藤 卓司氏(電話:03-3210-7480、E-mail: takuji.itou@mitsubishicorp.com) まで。

DIALOG

の紹介及び参加の勧め

DIALOG (Dissertation Initiative for the Advancement of Limnology and Oceanography) とは、アメリカで毎年開かれている、海洋及び陸水域の分野(生物、物理、化学全般)で博士の学位を取得したばかりの世界各国の研究者が集まり、各自の研究紹介及び今後研究者としてやって行くにはどうしていけば良いかを話し合い、情報を交換し合うためのシンポジウムである。

具体的なシンポジウムの内容は、
1.参加者全員による各自の研究発表(オーラル+ポスター)：博士課程期に行った研究の意義、位置づけ、今後の研究の展開の紹介。
2.ワーキンググループ：各自研究を行っていく上で日頃悩んでいるテーマを提案し、数人ないし全員での話し合い(具体的なテーマ：研究①空間・時間スケールの異なる研究

間の融合、②モデルと観察実験との間のギャップ及び融合、③国際共同研究・学際研究を行うには：社会①科学(研究)と政治(社会)の間のギャップ、②ポストドクの需要と供給のバランス；就職①研究者としてやって行くには何が重要か、②良い研究者とは(e.g. 論文数)、③ポストドクの時期を有効に過ごすには、④良い指導者・教育者とは、⑤新たに研

長崎大学環東シナ海海洋環境資源研究センター 栗原晴子

究室を立ち上げるには、⑥パーマナントな研究職につくには、⑦共同研究を行うには、⑧ネットワークを広げるには：私生活①私生活と研究生活の両立、②研究者間の結婚、③ジェンダー問題。

3.コミュニケーショントレーニング：現役新聞記者や科学雑誌の編集者が参加し、社会や世間が研究者に対して何を求めているか、研究者が社会に研究を還元する方法に関する討論、新聞記者と模擬的にインタビュー形式で自分の研究を説明するトレーニング。

4.専門家による就職活動や研究申請に関する情報提供：「良い申請書」を書くに当たっての具体的なアドバイス、就職活動での自己体験(面接での質問)等の情報提供。

5.その他：DIALOGのスポンサー機関(NSF, NOAA, ONR)の紹介や

ドルフィン島散策、モバイル市内観光等が行われた。

このシンポジウムの特徴としては基本的な流れは決まっているが、話し合いの具体的な内容等は参加者で決める方式であるため、参加者全員が積極的にシンポジウム参加し、自己の意見を言う事が求められることである。また研究発表の質は非常に高く最新の情報を得ることができること、さらに世界中に同じような立場の良き研究者仲間ができるということがこのシンポジウムの最大の魅力であると思われる。

DIALOGシンポに参加する具体的な方法はASLOのホームページ <http://aslo.org/phd.html> にて情報を得ることができるが、参考までに今年度のDIALOG VIIは2005年12月3-10日の日程で行われる予定である。

ICRI News

Vol. 1

(財)自然環境研究センター 日比野 浩平

新規連載：「ICRI News」がスタートいたします。

これまで、ニュースレターでも数回に渡ってお知らせしてきましたとおり、ついに7月1日から、日本とパラオ政府によるICRI (International Coral Reef Initiative= 国際サンゴ礁イニシアティブ) の事務局がスタートしました。今後日本が2年間に渡って事務局を担当していくにあたって、この連載では、ICRI関連の活動や出来事などを紹介していきたいと思ひます。



☐ セイシェル総会

4月25-27日にICRIの総会がインド洋のセイシェル共和国で開催されました。セイシェル総会は、ICRI創設10周年の節目に当たっていたとともに、日本とパラオにとっても事務局をスタートする直前の総会でもあったため、重要な意味がありました。総会では、昨年のインド洋津波被害に対する様々な対応や、ICRI10周年の総括などが議論されたとともに、次回総会(パラオ)や国際熱帯海洋生態系管理シンポジウム(ITMEMS)の開催場所や時期が決定されました。詳しくは、国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターのホームページ(<http://www.coremoc.go.jp/>)の中の「ICRI」ページをご参照下さい。

写真：パラオ総会が開催されるカルチャー・センター(Ngarachamayong Cultural Center)。各種国際会議などが開催できる広い会場です。

☐ 日本・パラオ事務局がスタート

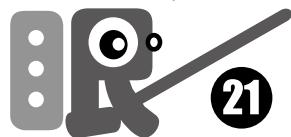
7月1日から、日本・パラオ共同事務局がスタートしました。これまで約1年間にわたって、事務局を引き継ぐために、前のイギリス・セイシェル前事務局と調整をしたり、パラオ関係者と準備を進めたりしてまいりました。7月1日からは、ICRIの公式ホームページ(<http://www.icriforum.org/>)の事務局情報(当トップページ:ABOUT ICRI→Composition of the new secretariat)も日本・パラオ事務局体制に更新され、今後2年間、この体制で事務局業務を進めることになりました。

☐ パラオ総会開催に向けて

事務局を引き継いだのも束の間、すでに最初の総会(パラオ/10月31日~11月2日)の開催に向けて日本・パラオ事務局は慌しく準備に追われています。総会の準備には、会場(写真)・宿泊施設などの手配・準備、議題の調整、議題文書の準備、関係者へのアナウンス、途上国参加者への旅費の支援など、様々な準備や調整が必要です。普段は、パラオとUNEP-WCMC(在イギリス)を含め、事務局内でメールや電話で毎日のように連絡を取り合っていますが、それでも足りないため、8月上旬には、会場の視察なども兼ねて、総会前の事務局運営会合を現地パラオで開催する予定です。パラオ総会の具体的な議題などは、随時「ICRI」のページにアップしていきます。

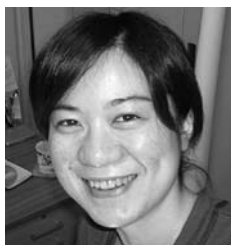
連載 3

若手会員の



A young member's eye

東北大学大学院特別研究員
井上麻夕里



皆様こんにちは。初めましての方が多いと思いますが、私は東北大学大学院特別研究員の井上麻夕里と申します。私の主な研究内容は、サンゴ骨格中の重金属元素を測定し、過去から現在への海洋汚染を復元することです。分析がメインなので、普段の研究生活は居室と実験室との往復で、実験が切羽詰まってくると全く外に出ない日もあります。室内に閉じこもっての研究は、お肌にはいいのかもしれませんが、精神に時々異常を来します。こんなときに飲むお酒は精神安定剤としての効力を首尾よく発揮し、明後日への活力をみなぎらせてくれます(明日は二日酔い)。私の所属する研究室はボスである川幡先生をはじめ、お

酒好きな人が多いので、研究室でもよく飲みに行きます。川幡研は現在のところ修士課程の学生2人と博士課程の学生3人、プラス私を含めて2人のポスドクがいますが、白亜紀、第四紀、近過去の環境復元から、エル・ニーニョ変動や環境汚染までみんなの研究対象は様々です。個々人の研究内容はバラバラなのですが、花見やバーベキューといった催事の際の結束力は強く、この手際の良さが研究にも生かせれば、と思うことが多々あります。とは言え、もちろん普段はみんなちゃんと研究をしており、研究室にある安定同位体比質量分析計から、有機分析のためのLC、GC、LC-MS-MSさらに無機分析用のICP-AES、ICP-MSなどの測定機器が学生自らの手で動かされており、これらの機械が同時に稼働していることも珍しくありません。川幡研で行われている研究の詳細についてはここでは割愛させていただきますが、ご興味のある方は<http://unit.aist.go.jp/igg/rg/cycle-rg/gtop.html>までお越し下さい。

私は修士課程まで岡山大学の菅浩伸先生が指導教官でした。学部4年生の時に初めて石垣島へ行ったのですが、その時に髄膜炎という病気になってしまい、八重山病院に2週間も入院してしまいました。高熱と頭痛にうなされていたのですが、病室では隣のおばさんの本場の島唄を聞くことができ、病院食では八重山料理を味わえたりと、今から思うとなかなか充実した入院生活でした。でも退院できた時はやはり嬉しくて、

病院から民宿までの帰りに車から見た海の美しさは今でも忘れることができません。素晴らしかったです。しかしこのように私が一人感動している時に、岡山では菅先生がかなり心配してくれて、ヘリコプター出動要請まで出かけていたらしく、そのことから、気が付けば私は「ヘリ子」と呼ばれるようになっていました。サンゴ礁学会に行ったら「ヘリ子」と呼ばれるたびに、あの石垣の美しい海と、一応苦しかった入院生活が思い出されて、少しセンチメンタルな気分になるのです。そして必ずそのセンチな気分の後に、あの時もし本当にヘリコプターが来ていたら、私は一体どこへ連れて行かれていたのだろうか?と考えてしまいます。

研究の話から逸脱してしまいましたが、このように修士までは菅先生、博士課程からは川幡先生に研究の指導をして頂きました。また、修士課程から一貫して産業技術総合研究所の鈴木淳さんにも熱心な指導をして頂きました。端的に表現しますと、菅先生は海好き、川幡先生はおいしいものが好き、鈴木さんは研究好きであり、この3人に指導いただいた学生はバランス良く育っているのではないかと自負しております。ここまでおつき合いいただきまして、私あるいは私の研究、あるいは川幡研にご興味を持たれた方は、mayuri-inoue@aist.go.jpまでご一報下さい。今後とも川幡研をどうぞよろしく願い申し上げます。

連載 4

瀬底日記 SESOKO
最終回
にぎわい琉球大学熱帯生物圏研究センター
瀬底実験所 中野義勝

人気連載「瀬底日記」が遂に最終回を迎えてしまった(涙)...。著者の中野さんにはvol.11から5, 6回程度で執筆を依頼、その後、無理を言い続け14話書いて頂いた。毎号、楽しみにしていた読者も多かったことと思う。中野さん、実験所からのほのぼのとしたお便りをありがとうございました。皆様、最後までじっくりお楽しみ下さい。

広報 波利井



瀬底日記も、多くの方の励みやお叱りに支えられて14回を数えた。どうやら、編集委員会からも放免のお達しをいただいた。今回が最終回です。長ら

く駄文にお付き合いいただき有り難うございました。

と書く、ホッとされた方も多いのではないだろうか。人の往来である実験所は逸話の宝庫でもある。まだまだ、登場いただきたい主人公は大勢いる。今では笑い話であっても当時は深刻な話もある、オムニバス風に。残り少ない紙面でどこまで紹介できますやら。

-自炊-

橋の架かる前から、そして今でも実験所に宿泊すると自炊することになる。料理心のある者がいれば、共同炊事を楽しむ余裕もある。さらに、大量に材料を仕入れて作ったカレーを忙しいみんなに売って、感謝されての商売にいきなりそむきもいた。しかし、以前書いた栄養失調ほどではないにせよ、怪しい夕食を経験する者もいる。たった一つ残ったボンカレーを二人で分けて、最後はレトルトのバックを箸でしごいてご飯にかけた。

-消耗品-

未だに、西原の琉大キャンパスのトイレには「トイレットペーパー持ち出し禁止」と張り紙がある。かつて実験所でも、実習の度に購入したシャンプーや歯磨きがすぐに消えてしまうことがよくあった。ある実習が終わって、食堂の床下から米が何袋も出てきたことがある。それほどまでに飢えていたのか、未だに話題になる謎である。

-ハブ-

瀬底はハブの多い島だそうだ。私も夜中、草む

らから這い出てきたハブに気づくのが遅れ、踏み出した一歩でそのままハブを飛び越えて難を逃れたことがある。海には眼鏡をかけてゆけない。夕方調査が終わって海から上がり、着替えようとサンダルを履いたとたんガブリとやられた者がいた。目が悪くて、サンダルの上にいた子ハブが見えなかったという。子供でもハブはハブ、さっそく病院へ行き一泊することになった。病室にはやはりハブにかまれて1週間の入院患者もいたそうで、恐ろしい夜だったそうだ。

-ワモンゴキブリ-

沖縄のゴキブリは大きくてよく飛ぶ。夜中、側溝の蓋の上など歩いているところを出くわすと、必ずこちらに向かって飛んでくるので恐怖である。寒さには弱い、最近では都心のビルにも侵入しているようだ。一夏を実験所で過ごした学生と東京であった。話の合間にげっそりした顔をして、東京の研究室にワモンゴキブリが夜な夜な出るようになったと言う。荷物に忍び込んだ瀬底産らしい。



今年も夏が来た。世代をつなぐ生殖のシーズン。生物を扱う研究者にとってはデータの書き入れ時でもある。世界的業績とともに多くの逸話を30年積み上げてきた実験所の、次の30年を楽しみに、続きは酒の席ででも。

連載 5

サンゴ礁関連施設
深訪 INQUIRY
-12-財団法人 自然環境研究センター
Japan Wildlife Research Center

研究員 日比野 浩平

自然環境研究センター(略称:自然研)は、ニュースレターの「施設深訪」とは無縁の機関だと思っていましたが、ついにその順番が回ってきました。それだけ地味な機関で、よく周りの人から、「自然研って何やってるんですか?」と聞かれます。あまり従来のイメージを覆すような紹介はできませんが、今回はできるだけ自然研のありのままの雰囲気をお伝えできればと思います。

自然研は、「人間社会と自然との共存関係をいかに保っていくのかを、科学的・政策的に研究する機関」として、平成4年に日本野生生物研究センターから名称を変更して設立されました。主務官庁は環境省で、特定公益増進法人です。所在地は東京都台東区下谷で、パツとしない下町の一角に細長いビルを構えています(写真)。職員数はおよそ100名で、事務局の数人以外は、動植物/水陸など分野を問わず、様々な野生生物関係のバックグラウンドをもった研究員で主に

構成されています。要するに「生物オタクの巣」のような所です。対象業務が野生生物/環境関係全般に渡っているためと、職員の専門分野がバラバラなこともあって、一つの目的に会社一丸となって向かうというよりは、各自がそれぞれの業務を黙々とやっているといったイメージです。私は未だに誰が何の専門でどんな仕事をしているのかほとんど知りません。自然研の名称から、実験室や標本室などを完備しているようにイメージされる方もいらっしゃるようですが、雰囲気は「普通の会社」となれば変わりありません。まあ、スーツを着ている人が少ないのと、そこら辺で飛び交っている会話の中に種名や学名が多く含まれていたり、一見普通の女の子が、カエルやトカゲを持ってウロウロ歩き回っていたりするぐらいの感じです。

自然研の前身の(財)日本野生生物研究センターは、もともと陸上動植物の専門研究機関として、カモシカや植性調査など陸域の業務を中心にやっていて、海洋関係の業務はほとんどありませんでした。しかし、2002年に(財)海中公園センターが解散となり、海域の調査研究機能が自然研に移転されたこともあって、サンゴ礁関係と関連生態系(マングローブや海草藻場などを含む)の仕事が徐々に増えるようになりました。サンゴ礁関係の業務には、環境省や都道府県のサンゴ礁関連プロジェクトや調査、アジア地域のGCRMN調整業務やJICAの研修などの海外関係業務、海草藻場の調査を含むジュゴン調査などを行っています。2005年~2007年には、日本とパラオ共和国が共同で国際サンゴ礁



イニシアティブ(ICRI)の事務局をホストしており、環境省をサポートする事務局業務にも関わっております。

現在、自然研でサンゴ礁をバックグラウンドとしてもつ職員は、木村、下池、日比野の3名。社内では「サンゴグループはおとなしい」とのまじりの評価で

勢力図的にも小規模です。どうもサンゴ礁関係者は都会に馴染めない部類の人間が多いようで、みんな片道2時間近くかけて通勤してきています(うち2名は新幹線通勤!)

自然研の業務は、立場上もっぱら調整業務が主ですが、これからも行政、研究機関、民間企業、NGOなど、異なるセクター間の「潤滑油役」として、サンゴ礁の保全・管理・研究・普及啓発などにおいて、より良いサービスを提供していきたいと考えております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

<http://www.jwrc.or.jp/>
編集
後記 Edit postscript

年のせいか海パン一枚では夏の日射しに抵抗できなくなってきました。皆さんもくれぐれ

も過信せず、野外での健康・安全管理に心がけて下さい。

編集担当 杉原

JCRS
Japanese Coral Reef Society
2005年7月25日発行日本サンゴ礁学会ニュースレター [2005/2006 No.1]
Newsletter of Japanese Coral Reef Society No.26

●編集・発行人/「日本サンゴ礁学会広報委員会」
日比野浩平・安部真理子・木村匡・杉原薫・野崎健・藤村弘行・梅澤有・鈴木倫太郎・中井達郎・波利井佐紀・山野博哉
●発行所/日本サンゴ礁学会 ●事務局/茅根 創 <Kayanne@eps.s.u-tokyo.ac.jp>
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻 Fax: 03-3814-6358

生まれたばかりの熱帯林が、 CO₂を酸素に変えるために、 大きく葉っぱを広げようとしています。

“熱帯林再生実験プロジェクト”が進んでいます。
地球に酸素を供給している熱帯林を維持するために
私たち三菱商事が1990年にスタートした試みです。
大切なのは、その土地に自生する木を種から育て、
自然のルールにそって植林していくこと。
マレーシアのボルネオと、ブラジルのアマゾン流域では、
今日も一本一本植えられた若木が
照りつける太陽のもと、上へ上へと枝葉を伸ばしています。
スタート時に植えたエリアには、
早くも若々しいジャングルが出現しました。
理想は、大自然そのままの熱帯林。
地球の明日と私たち人間の明日のために。